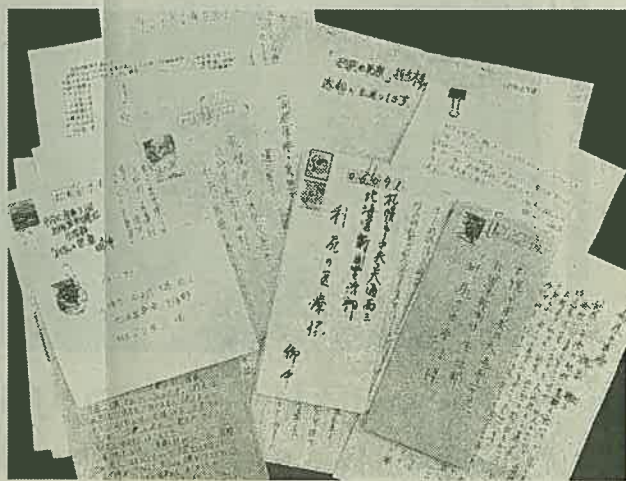


11 62/10

都会との格差を 少しでも縮めて

企画「利尻の医療」に反響

十月二十三日から二十七日まで五回連載した企画「利尻の医療」には、今月一日までに約一千通の反響が寄せられた。複雑な手続きのため夜間、救急患者搬送ヘリの出動が遅れる現状を早急に是正して都会との格差縮小を求める声が相次いだほか、人工透析ができずに島を離れるお年寄りなど島外の病院への通院、入院を余儀なくされる離島の深刻な実情に対して、医療体制充実を望む声が目立った。



読者の思いをつづった手紙やファクス

でも医師が救命救急士の同乗するヘリ四、五機が地上の救急隊と交信しながら全道をかバーする体制をつくらなければならない」と提言する。

また住みたいが...

この夏、妹の嫁ぎ先の利尻町を訪れ、島国保中央病院の存在を知った十勝管内補幌町の主婦遠藤和子さん(48)は「へき地勤務を敬遠する医師が多い中で、利尻の若い医師が住民のために献身的に活躍されている姿に感動した」と伝えてきた。

大都市から離れているだけに、命の格差があるのは許されない」と、ヘリ搬送の改善を求めている。現場で救急業務に携わっている苫小牧市消防本部救

ヘリ搬送強化急げ 医師の

急隊の亀山誠司さん(33)は「病院の都市集中はむしろ得ないとしても、救急医療に関しては道内が同じ条件でなければならぬ。患者を安全でスピーディーに運べるなら、どこに所属するヘリでも構わない。欧米のシステムを見習って、道内

てきた。離島や遠隔地にとって、一番頼りになる救急搬送のためには、すぐに飛び立てる航空自衛隊のようなヘリを配備すべきではないかと正を求めている。

者の応急処置に当たる医師の姿を取り上げた。

企画の第一回「ヘリが来ない」では、道警ヘリが出動できないと決まってしまう、あらかじめ航空自衛隊に出動を要請、ヘリ搬送が遅れる中で、懸命に救急患

留萌管内塩町に生まれ、た札幌市の富樫武勇さん(35)は「同じ人間なのに、

釧路管内・町立厚岸病院長を務めた五十嵐正弘・自治医大教授(地域医療学講座)に連載を読んだ感想を寄せてもらった。同教授は利尻島国保中

1-3の仕事ができる。集まることで①高度医療ができるようになる②いろいろな考えの医師がいることで、患者の個性に応じた運

五十嵐・自治医大教授に聞く

医師3人体制を評価

一人体制ではなく、内科医二人、外科医一人の三医師が働くメリットを評価している。

識、意欲であると思う。その意味で、離島で働く医師を育てるのは地元の人々である。

医療へのアクセスが、いまだに重要問題であるのが

集まって共同すると、1+



離島などからの救急患者を受け入れる札医大屋上のヘリポート